

【風炉・炭手前・簡略版（水次などある版）】

※最簡略版と相違がある箇所を太字で記した

茶道口をあけて炭斗を持ちだし、風炉の右に置く。

襖を閉めにいって、戻る。

和巾を取って捌き、絞り和巾にて釜の蓋を閉め、すぐ和巾を腰に付ける。

羽簾を風炉と炭斗の間に下ろす。

鎌を取って釜に掛ける。

釜敷を炭斗から下ろして（あるいは、紙釜敷を懷中から出して）炭斗の前に置く。

左の膝を立て、釜を下ろし、釜敷の上に置いて膝を直し、釜を右の方（下座の方）に引いておく。

鎌を外して、釜の摘み通りの右側に置く。（合口が自分の方）

羽簾を取って風炉を掃き、元のところに置く。

火箸を取って下火を直す。

（このときに火箸に灰がついたのであれば、羽簾を取って灰を掃い、羽簾を元に戻して火箸も元に戻す）

羽簾を取って風炉を掃き、羽簾を炭斗の右前（客付）に真っ直ぐに置く。（羽先が風炉敷板の通りくらい）

香合を取って羽簾の柄の右に置く。

炭斗を風炉の際に寄せる。

火箸を取って左手に移し、右手で胴炭を取って風炉のなかに置き、それから火箸を右手で取って順々に炭をついでいく。

最後に留炭をして、火箸を炭斗のなかへ入れ、炭斗を元の場所に移す。

香合を取って蓋をあけ、蓋は居前（畳の中央あたり）に置く。右手で香合に入っている香木（正式には伽羅であるが、略式なので白檀など）を火合の所に置いて焚く。

香合の蓋をする。

（客から香合拝見の所望）

香合の蓋上をさっと手で拭いて客に出す。（風炉敷板の前端の通りあたり）（客も拝見を終えたら同じところに置く）

※香合拝見がなければ（省略するならば）、蓋をしたらすぐ炭斗に入れる。

羽簾を取り風炉の縁を掃き、羽簾を最初の通り風炉と炭斗の間に置く。

釜の方に向きを変え、和巾を捌いて（絞り和巾）釜の蓋を取り、湯の様子を見て釜の蓋を閉め、和巾を腰に納める。

（客から「炭拝見致すべく候間、水控え申候様に」と挨拶あり）

鎧を取り釜に掛け、釜を炭斗の前まで引き寄せ（炭取の右前あたりまで真っ直ぐ（真横）に引いて炭斗の前あたりで斜めにする）、鎧を外し左手で鎧を釜の左（炭斗との間）に置く。

（鎧の切れ目は釜と同じく斜めで自分向き）

水屋に下がり、茶道口を閉めておく。

客は順次に炭を見物に出る（客一同で一緒に見ることはしない）。

客は炭の見物が済んだら自席に戻る。

客の炭見物が終了したのを見計らい、水次の上に手巾をのせて持ち出し、点前畳に仮置きして茶道口を閉め、また戻って水次を取って、客付に座り、居前の右の方に置く。

釜に向かい（斜めを向く）、左手で水次の手巾を取り、右手で水次の蓋を取り、蓋を釜の前に仰向けて置く。

左手の手巾を右手に移し、そのまま手巾で釜の蓋を取って、釜の蓋を水次の蓋上に置く。

(※水次の上の手巾を右手で取って、釜の蓋上に置いておき、それから水次の蓋を右手で取って釜の前に仰向けて置いて、そして釜の蓋を手巾で取って水次蓋上に置く、…という方法でもよい)

手巾を左手で取って、水次を右手で持って左手は手巾で水次を持ち添え、釜に水を注ぐ。

手巾で水次の口の露をちょっと拭き、水次を元の所に置く。

手巾をまた右手に移し、そのまま釜の蓋をとって、釜の蓋を閉める。

手巾は直に釜の蓋に預けておく。

水次の蓋をして、水次を少し後ろ（茶道口方向・少し勝手付）に下げる。

手巾で釜を法の通り拭く。

釜を拭いた手巾は、水次の首に掛ける。（水次の蓋上でも構わない）

茶道口を開け、水次を下げる。

（水次の蓋が釜蓋置の代わりにならないようなものの場合は、水次と一緒に蓋置（竹輪）を左手に持ち添えて出て、水次を置いたらちょっと右手で取り直して釜の前に置く。水次を後ろに下げるときに、蓋置も水次の脇（水次よりも更に茶道口・勝手付寄り）に置き、水次を下げるときに一緒に左手に持ち添えて出る）

（蓋置を水次の口に挿す方法もある）

また出て茶道口を閉め、風炉の火の移りを確認し、鎧を取り、釜に掛ける。

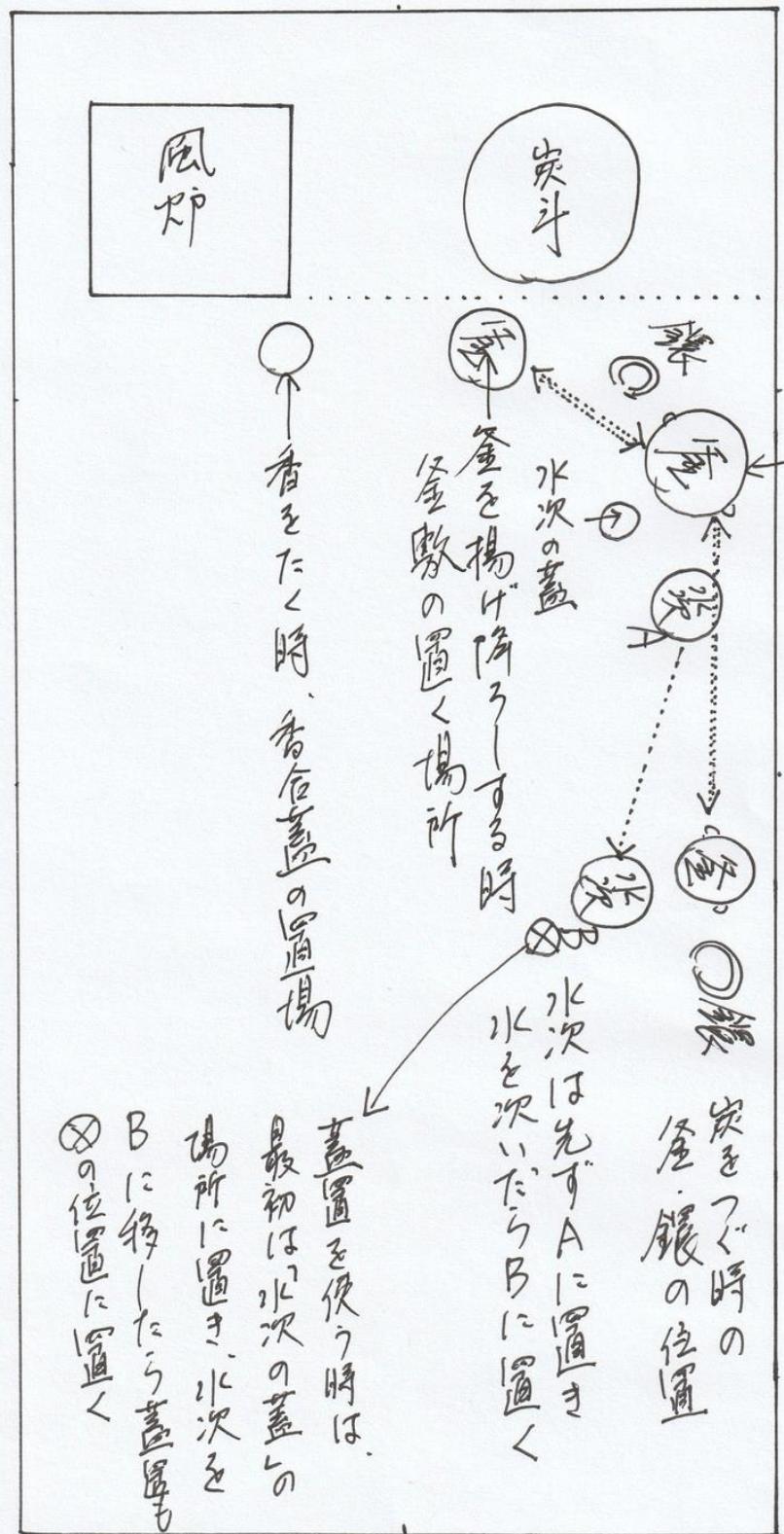
最初に降ろしたところまで釜を寄せる。

左膝を立て、釜を風炉に掛け、膝を直す。

釜敷を取って炭斗に戻す（もしくは、紙釜敷を取って懷中する）

釜の据わりを直し、鎧を外し、炭斗のなかに入れる。

（香合拝見があった場合）客から戻っている香合を取って、炭斗のなかへ入れる。



襖を開けに行き、点前座に戻って、炭斗を引く。

また出て、羽簾にて点前座を掃き、羽簾を左（勝手付）の壁際に置く。

風炉に向かって座り、帛紗を捌き、釜の蓋を清め、釜の蓋の口を切り（湯が沸いていなければ後で）、それから風炉を拭き（焼物やカネ風炉の場合は拭かない）、敷板が塗あれば敷板も拭く。

帛紗を腰に納め、また羽簾を持って掃き入れ、挨拶して茶道口を閉める。

※図の、水次 A の位置はやや釜に近づき過ぎである。もう少し下（手前者から見て右）に置いたほうがよい。